

ヴェーバー研究の現在と〈批判〉の精神 ——科学主義とフォーディズムの終焉をめぐる

鈴木 宗 徳

1. ヴェーバーの〈人格〉という問題

先だって、羽入辰郎による『学問とは何か』が公刊された。前著『マックス・ヴェーバーの犯罪』（2002）から6年、その間、折原浩が4冊にわたる新著を出して繰り広げてきた羽入批判に対する著者自身による応答が、ようやく明らかとなった。羽入がヴェーバー研究史に与えた影響ないし功罪については、ここでは扱わない。ただし、この“論争”が与える奇妙な印象についてはどうしても触れずにはいられない。

羽入の研究は、ただ一言「ヴェーバーは詐欺師である」という、その人格に対する「全称判断」（折原）を導き出すために行われている。しかし、羽入がなぜそれほどまでに「知的誠実性」をはじめとするヴェーバーの倫理的態度にこだわるのか、なぜヴェーバーの〈人格〉が問題なのかについて、筆者をふくめ大方の読者は得心できないままだろう。もっとも、今回の応答の書では、むしろ仇敵・折原の個人的な資質に対する批判が全面的に繰り広げられているのを見ると、相手がヴェーバーであれ折原であれ、その〈人格〉を批判するという特異な著述スタイルは、多分に著者自身の個人的なパーソナリティに起因するものであろう。

しかしまた、批判の対象がかの「聖マックス」であること自体が、羽入のみならず一定の数の読者をして、〈人格〉批判への関心を掻き立てる動機となっているのかもしれない。扱う論点は異なるものの、これについてまったく同じことを考えさせるのが、今野元の新著『マックス・ヴェーバー——ある西欧派

ドイツ・ナショナリストの生涯』(2007)である。今野は、同書を批判する雀部幸隆に対する応答のなかで、自分の研究が「ヴェーバーを糾弾するものでも擁護するものでもない」と述べてつも、「ナショナリズムという現象に社会科学者として醒めた視線を送りながら、政治においては脇目も振らずナショナリズムに邁進する」などという「生身の人間ヴェーバーの両義性」に関心があると告白している [今野2008]。

数多くの論者が、生身の「人間ヴェーバー」ないしその〈人格〉を研究対象にしてきた⁽¹⁾。かつてマルクスの個人的なゴシップが話題になったこともあったが、今ではその〈人格〉が研究される思想家など、ヴェーバー唯一人ではないだろうか。とくに、ヴェーバーは激烈なナショナリストの顔とリベラルな改革者の顔の両面を併せもっているため、今野の言うような「両義性」が関心の対象になるというのは、分からなくはない。

2. 両義性の人

振り返れば、この「両義性」は、これまで日本のヴェーバー研究を大きく規定してきた要因の一つだったかもしれない。ただし次に述べるように、筆者は必ずしもヴェーバーの人格に内在する「両義性」のみが問題であるとは考えていない。

過去30年間の日本のヴェーバー研究は、大塚久雄によって確立された「近代化論者／近代主義者」としてのヴェーバー像に対し、「近代批判者」としての新たな像を対置させるという緊張関係のなかで進められてきた⁽²⁾。そこでの対立軸は、プロテスタント的“人間類型”をヴェーバーが肯定していたか否かであった。ただし別の観点からみれば、この対立はヴェーバーを「前近代性の批判者」とみるか「近代性の批判者」とみるかの違いであって、少なくとも日本の研究者の間では、いずれの陣営もヴェーバーをとともにリベラルな「批判者」と認識していたとも言えるのである。そして、戦後日本のヴェーバー受容の過程で、人間ヴェーバーの〈人格〉そのものが規範的理想と見なされていたとす

るならば、その根拠もまた、「リベラルな批判者」という不動のイメージに立脚したものであった。

その一方、戦後ドイツのヴェーバー研究の文脈では、モムゼンに代表される「権力国家論者」としてのヴェーバー理解〔Mommsen1974〕が影響力を行使しつづけていた。ここに、戦後ドイツと戦後日本のヴェーバー受容における見過ごせない相違がある。おそらくこうした理由から、ドイツでは日本ほどにはヴェーバーの〈人格〉崇拜が行われることはなかっただろう。じっさい、ヴェーバーの人格が、戦後社会がその範とすべき理想であったと言い難いのは間違いない。モムゼン・テーゼが極端であるにせよ、たとえば「国民国家と経済政策」（1895）などから読み取れる「ナショナリスト・ヴェーバー」の姿は、日本の研究者の間でも周知の事柄であった。

ここで、次のような問いを立てることができるだろう。それでもなお、戦後日本において、むしろ「リベラルな批判者」としての“聖”ヴェーバー像が定着したのは、一体どのような理由によるものなのか。それは、彼の〈人格〉が鮮明にあらわれる政治評論などよりも——さらには宗教社会学研究よりも——、むしろ『職業としての学問』や『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』など学問論における彼の主張が広く読まれ、そのことが「批判者ヴェーバー」という人物像を広める上で大きく寄与したからではないだろうか。

3. 構築主義の先駆者

学問・科学論の領域におけるヴェーバーの様々な「批判」は、その後の社会科学の歴史に大きな足跡を残した。ここで、学問論における批判者・ヴェーバーの姿を概観しておこう。

総じてヴェーバーの学問論は、認識対象に内在する「本質」を「客観的に」把握できるとする「実証主義」的な学問観に対し、逐一留保をつけて批判してゆく点に、大きな特徴がある。今日よく使われる言葉に置き換えると、ヴェーバーは一貫して「本質主義」を批判し、「構築主義」的な認識方法を提唱して

いたのである。たとえば、次のような主張がこれにあたる。

① その「理念型」論。「類概念」を無前提に適用する実証主義的な認識方法を排し、研究者の主観的観点によって構築される「理念型」を使用することを主張する（『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』）。

② その「現実科学」論。社会科学は法則の定立を最終目標とする「法則科学」ではなく、個別具体的な因果連関の究明を目的とする「現実科学」であると主張する。すなわち、社会現象の背後に、その本質とみなし得るような普遍的な法則が存在すると想定することはできず、一般法則は仮説的に構築された手段にすぎないことを主張する（同上）。

③ その「神々の闘争／価値多元主義」論。あらゆる場面に一貫して適用し得る行為規範、すなわち単一の究極の価値などは存在せず、現代人は、その都度、個人の責任において価値選択をするしかないと主張する。ア・プリオリに存在する不変の価値を想定する本質主義とは逆に、人生において自らの主義主張を一貫させようと思えば、個人の責任でこれを構築しなければならないとする（『職業としての学問』）。

このように、ヴェーバー自身は必ずしも自覚していないかもしれないが、彼の学問論の多くは「構築主義」の語彙によって説明することができる。そして、こうしたヴェーバーの主張こそが、その人物像をイメージする上で少なからぬ影響を与えたと考えられるのである。

筆者は次のように考える。このような彼の学問論を基礎に、そこから演繹的な推論をおこなった場合、これらを主張する当人を、たとえば「共同体主義者」や「ナショナリスト」であると想定することは不自然ではないだろうか。なんとなれば、これらの立場は、いずれも共同体やナショナルに内属する不変の「本質」を前提としなければ成り立たないからである。「批判者ヴェーバー」すなわち「構築主義者ヴェーバー」は、純論理的にはナショナリストや前近代的な共同体の信奉者であってはならない。そのため、その学問論を学んだ者は、少なくとも「前近代批判者」という表象をつくらざるを得ないのである。

4. 科学主義批判

実は、同じことがヴェーバーを「近代批判者」として解釈する場合にもあてはまる。「近代主義」をどう理解するかは観点によってさまざま可能であるが、そのメルクマールとしてよく挙げられる「個人主義」、「大衆動員」、「計画的かつ画一的な大規模行政」などに加えて、とくにここで取り上げたいのは「科学主義」という特徴である。

近代社会は、科学と技術によってその栄光と悲慘を経験してきた。中央集権的な近代国家は、科学技術と経済学とを縦横に駆使した国家経営によって産業主義的な経済成長を推進するとともに、科学技術の軍事利用によって、人類の制御能力をはるかに凌駕する破壊力をもつ兵器を生み出してしまった。膨大な国家予算をつかって科学技術をここまで発展させたのは、ほかならぬ近代国家である。近代主義と「科学主義」の連関が問題となるのは、ひとつには、科学の国家利用を介して科学が中央集権的に組織された近代社会と不可分の関係にあるからである。

近代社会と科学主義との結びつきは別様にも説明できる。科学主義という言葉は、「客観主義的」ないし「実証主義的」な学問観を指して用いられる。たとえばヴェーバーが批判する「法則科学」という学問観は、自然科学の著しい発展と、その成果を経済学や心理学など人文社会諸科学に応用することによって生まれた考え方であるが、これも「科学主義」のひとつである。「科学主義」は、フランス社会学史のなかで生まれた語彙である「実証主義」と意味の上で重複している。すなわち、「客観的」な経験的事実から出発するだけで、その研究成果は「客観的」なものととして定式化しようという信仰である。ヴェーバーは、実験心理学の最新の成果やオーストリア学派の経済学など、法則科学として発展しつつあった学問を（あくまで）「手段」として利用しながら、それとは異なる学問観を打ち立てようとした。それが「現実科学」の構想であるが、これは「科学主義」が席卷してゆく当時の流れに対するヴェーバーなりの抵抗であったと読むことができる^③。

法則科学批判としてのヴェーバーの科学主義批判は純粹に学問方法論上の主張であるが、それが「近代社会」そのものの批判にまで到達する長い射程をもつ考え方であることは、自ずと理解されるだろう。ふたたび演繹的な推論をおこなうなら、こうした法則科学批判をおこなうその主張者は、紛れもなく近代国家に対するリベラルな批判者であると想定するよりほかにはない。

それはなぜか。歴史や社会における一般法則の普遍妥当性を主張することは、その中で現れる人間の行為や主観的意味を、その従属変数に過ぎないとみなすことになる。これは、ヴェーバーの官僚制論に見られるモチーフと親和関係にある。現実の近代社会が生み出した「官僚制」とは、あらゆる場面で法則ないし形式的な規則を貫徹させる組織原理であり、その意味でパーソナルな感情や、実質合理性にもとづく行為を抑圧してゆく。これこそが、合理的な官僚組織が生み出す「鉄の檻」にはかならない。ヴェーバーの法則科学批判を読む者は、これを規則と規律による支配、すなわち官僚制に対する彼の批判とむすびつけて理解する。ヴェーバーの構築主義的な学問観を理解し、それから「支配の社会学」へと読み進めた読者は、彼の学問論に倣って、構築された近代官僚制を脱構築する方法を夢想しはじめるに違いない。「構築主義者」は「科学主義批判者」であり、さらに「近代批判者」であらざるを得ないのである。

5. 批判理論の源流としてのヴェーバー

ヴェーバーの構築主義的な学問観を読みながら、「ナショナリストやコミュニタリアンのはずはない」「官僚制批判者のはずだ」などと想像してしまうのは、けっして筆者ただひとりではないと思う。伝記や書簡や政治評論を読んでヴェーバーの人物像をじかに学ばずとも、その学問論で展開される彼の主張から「リベラルな批判者」というイメージが自ずと浮かびあがってしまうのである。ヴェーバーが多くの読者の目に「聖マックス」と映ずる理由のひとつも、ここにある。本質主義を批判しようと思えば、ヴェーバーは常にその参照点の役割を与えられ、それがヴェーバーの人格から流出するものと理解されること

さえある。しかし、それは多分に学問論から推論される架空のヴェーバー像に過ぎない。そして、そうであればこそ、伝記や書簡や政治評論にもとづく「現実のヴェーバー」をこれに対置させてあれこれ言うことにはあまり意味がない。そうした批判は、架空の藁人形を相手にしているにすぎないからである。

むしろ本稿が問題にしたいのは、科学主義批判を媒介として学問（科学）論と近代批判が連関するという、その事柄そのものをもつ今日的な意味についてである。以下に示すとおり、ヴェーバーの時代には自明だったこの連関が自明ではなくなりつつあるというのが、本稿の仮説である。

社会科学の主要な課題が「前近代批判＝近代化推進」であった時代は終わり、すでに「近代批判」の時代に入ったことは間違いない。しかし近年の社会学の学説には、産業主義的な「第一の近代」はすでに終わり、「第二の近代」の時代が始まったという主張がしばしば見られる。ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、ジークムント・バウマン、そしてジョック・ヤングといった名前がすぐに思い浮かぶが、1970～80年代以降の社会変動を分析し近代が新しい段階を迎えたと捉える論者は、ほかにも数多くいる。こうした議論の枠組みのなかでは、科学主義批判と近代批判との結びつきはどのような意味をもつのであろうか。

しかしその前に、ヴェーバー以外の「（第一の）近代批判」がどのようなものであったかについて確認しておこう。ヴェーバー以降の「批判的」な社会理論の多くは、科学主義批判と近代批判を車の両輪として発展してきた。その典型例が、『イデオロギーとしての技術と科学』（1968）のなかでハーバーマスが展開したテクノクラート（技術官僚）批判である。国家とテクノクラートが科学技術経営を独占することによって、「テクノクラートの意識」と呼ばれる大衆の無批判な態度が生み出される。ハーバーマスのこうしたモチーフは、同じ時期、彼がポパーやアルバートに対して「実証主義論争」を挑んだときのものと共通している。実証主義的な学問観を認めることは、知を操る専門家による知の独占を承認し、そのことによって批判的討議を鎮静化させてしまうことに

等しいと、ハーバーマスは考える。

ハーバーマスは、行政システムや経済システムといった「システム」に対して、シンボリックコミュニケーションが行われる「生活世界」を対置するが、そこにはフッサールの科学主義批判の影響がみられる。フッサールは、科学的世界を客観的世界であるとみなす近代の転倒した事態を批判し、生活世界という語を導入する [Husserl1996]。このロジックを、ハーバーマスは行政システムによる科学技術の独占が進む「後期資本制」の分析に転用したのである。ハーバーマスが描く「(行政) システム」と「生活世界」の二元論には、フッサールの科学主義批判とヴェーバーの官僚制批判の双方からの影響がみられるが、それはおそらく、ヴェーバーの学問論の中にフッサールによる批判と共通するものがあることを、ハーバーマスが読み取っていたからであろう。

同じことは、ハーバーマスの著作に影響を与えたマルクーゼの『一次元的人間』(1964)についても言える。ここでは直接にフッサールが論じられ、徹底した実証主義批判が繰り返られる。ハーバーマスは、ここから着想を得て『イデオロギーとしての…』を書いた。マルクーゼにせよハーバーマスにせよ、科学主義批判は近代批判と緊密に結びついている。とくに1960年代までの批判的社会理論の論者たちに共通する基本的な枠組みは、ヴェーバーがその学問論と官僚制論のなかで準備したものにはかならない。

6. マルクス主義とフォード／テイラー主義

ハーバーマスがここで「イデオロギー」という語を用いていることにも注目しよう。彼が科学や技術をイデオロギーであるとして糾弾するのは、科学が政治的には中立的かつ客観的なものにすぎないとする常識に反し、じっさいにはそれが産業主義的経済成長を無批判に肯定する意識を生み出す作用をもっているからである。「イデオロギー」は、科学／学問をはじめ政治や宗教など「上部構造」が物質的諸条件に規定されていることを暴き出す、マルクス主義ないし唯物論の伝統のなかで用いられる言葉である。この「イデオロギー」という

語に着目することによって、西欧マルクス主義（マンハイム、ルカーチ）によるイデオロギー論や虚偽意識論を経由してハーバーマスまで至る、大きな思想の流れを跡付けることができる。

イデオロギー論や虚偽意識論、そして物象化論といった批判的思想は、いずれも虚偽の意識が「構築されている」ことを批判する点で、筆者がヴェーバーの学問論のうちに読み取った構築主義という観点を共有している。虚偽意識ないしイデオロギーのなかには、ハーバーマスが指摘するように科学／学問も当然含まれる。すると、学問ないし意識一般が「構築」されていることの自覚を促すこうしたマルクス主義に由来する批判の流れも、科学主義批判と近代批判を車の両輪として発展した思想のひとつと考えて構わないだろう。

ヴェーバーから西欧マルクス主義、そしてフランクフルト学派にいたるまで、近代批判の志向をもつ1960年代までの思想の多くが、「科学主義批判」というモチーフを共有し、これを動力源として〈批判〉の戦線を拡大してきた。科学／学問が意識に対して強いる圧倒的な権力性を自覚し、科学／学問がもつ「構築」のメカニズムを解き明かした上でこれを脱構築するというのが、20世紀初頭から60年代までの主たる思想的課題だった。

このような思想的課題の共有にとって、その背景となった出来事とは一体なんだったのであろうか。なによりまず、1910～20年代にフォード主義およびテイラー主義という労働の「科学的」管理技術が発展したことが挙げられる。労働過程を個々の動作に分解して管理するこうした手法は、科学／学問の発展における科学主義化＝自然主義化のさらなる進展を意味するとともに、人間本性（人間的自然）を科学主義的に分析・一般化し、人間を経営組織のなかで貫徹される規則の従属変数に貶めるという意味で、人間自体の自然主義化を推進するものであるとも言える。

レーニンがテイラー主義を評価していたというエピソードに見られるように[Harvey1989: 邦訳175頁]、フォード／テイラー主義はまたたく間に世界を席巻した。そしてヴェーバーの官僚制論もまた、現代の社会学者によってフォー

ド／テイラー主義と同じ文脈で説明されている。ジョージ・リッツァの『マクドナルド化する社会』（1996）は、ファーストフードチェーンに見られる合理主義的経営の特徴——「効率性」、「計算可能性」、「予測可能性」、「制御」、「合理性の非合理性」——を、すべてヴェーバー官僚制論から引き出すとともに、それが学校経営や病院経営などあらゆる労働の場面に広がっていることを説明する。社会学史の研究者でもあるリッツァは、「ヴェーバーの官僚制論」と「フォード／テイラー主義」、そして（バウマンの『ホロコーストと近代』にならって）「ホロコーストにおける人間管理」という三つの現象を、「マクドナルド化」の共通の前史として論じている。この時代、すなわち1960年代までに、規則と規律による労働の管理、そして科学による支配が貫徹した。その時代の批判的思想が取り組むべき課題が何であるかは、リッツァが挙げるこの三つの現象によって否応なく規定されていたということである。

7. ポストフォードイズムの時代へ

この『マクドナルド化する社会』は、それにしても不思議な読後感の本である。ファーストフードチェーン店という見慣れた光景を切り口に最新の社会状況を分析する野心作でありながら、フォード／テイラー主義やホロコーストの話聞かされる読者は、どこことなく、かつての懐かしい時代を描いた本のよう

に感じてしまうからである。

社会学史を研究するリッツァ自身も気づいてはいるが、1973年の変動相場制移行とオイルショックを境目として、すでに時代はフォードイズムの時代からポストフォードイズムの時代へと移行している。労働の「フレキシブル化」を合言葉とするこの新しい時代は、労働市場の規制緩和を前提に、非正規雇用・アウトソーシング・下請けを最大限活用することによって、資本回転のスピードにあわせて生産労働をフレキシブルに適応させてゆく。フォード／テイラー主義に代表される「規則／規律による労働管理」はもとより、計画的かつ画一的な大規模行政システムさえも、規制緩和の推進を目論む現代の経営者によっ

て「硬直化」しているという烙印を押され、お払い箱とされてしまう。

リッツァは、デヴィッド・ハーヴェイらポストフォーディズムの理論家の所説を紹介しつつも、結論としてはマクドナルド化された組織がなお拡大していると指摘することによって、自分のテーゼの有効性を強調している。しかしこうした主張にはやはり違和感がある。仮にマクドナルド化＝規則／規律による支配がなおも進行中だとしても、そこから生じる問題は、ポストフォーディズムという条件下で生じつつある新しい問題とは、やはり区別して批判しなければならないからである。

リチャード・セネットは、著書『それでも新資本主義についていくか』（1998）や『不安な経済／漂流する個人』（2006）において、フレキシブルな労働形態の問題性を明らかにしている。フレキシブルに拡大と縮小を繰り返す組織においては、長期的な思考が否定され、技術の習得が無意味となる。労働者に求められるのは、課題から課題へと器用に渡り歩く能力、あるいは端的に「潜在能力」であるとされ、短期的な課題に順応するためには過去の経験をすすんで放棄することが求められる。組織がフレキシブルになることは、労働がフレキシブルになることを意味する。また組織がフレキシブルになることは、終身雇用の消滅と政府によるセイフティーネットの縮小を意味し、それは人間の人生そのものがフレキシブルになることを意味する。そのなかで、労働のみならず医療においても年金においてもフレキシブルに人生設計をおこなう能力、つまり不断に「自己管理」する能力が求められるようになる。

すでにウルリッヒ・ベックが『リスク社会〔邦訳：危険社会〕』（1986）において、労働のフレキシブル化とそれに伴う「個人化」という現象を指摘している。「1974年から1983年の間に…勤務と部分就業（勤務時間と勤務形態のフレキシブル化）との間のグレーゾーンが拡大した。長期的にせよ短期的にせよ一時的な失業が広範に分布している事実は、長期失業者の増大や失業と勤務との新たな混合形態と関連している。…社会的な不平等の先鋭化と社会的な不平等の個人化とは、相互に密接に関係している。この結果、システムの問題が個人の機

能不全へと変えられ、…また同時に個人の病と社会の危機が直接的連関をもつという状況が始まる」[邦訳140頁]。ここで言う「個人化」とは、フレキシブルな労働形態の浸透によって、失業や離婚など「社会的」な問題であったはずのものが、自己管理によって克服すべき「個人的」な問題として認知されてしまう事態を指している。さらに、ベックの個人化論とセネットの『それでも…』の影響のもと『リキッド・モダニティ』(2000)を著したジークムント・バウマンは、「個人に選択の自由はゆるされても、個人化を逃れ、個人化ゲームに参加しない自由はゆるされない」[邦訳45頁]という閉塞した現状を描き出している。

労働者に要求される「潜在能力」をめぐるっては、同じくセネットの影響を受けたパオロ・ヴィルノの『ポストフォーディズムの資本主義』(2003)が興味深い議論を展開している。ヴィルノは、アーノルド・ゲーレンらの哲学的人間学を引き、人間はほかの動物とは異なり、種に固有の環境に適応する専門化した能力が欠如した「未分化な動物」として生まれてくると論ずる。むしろ人間は未整備で未加工の「潜在能力」を備えており、この潜在能力を用いて「文化」を構築し、不安定な「世界」を安定した「(疑似)環境」に作り換えるのである。しかしポストフォーディズムの時代には、人間に備わったこのフレキシブルで不安定な潜在能力、すなわち剥き出しの「人間本性(人間的自然)」が、労働において要求されるようになる。

ヴィルノの議論によって明らかとなるのは、安定した環境のなかで人間が生きるためには、フレキシブルな世界ではなく、専門化され反復する規則に支配された世界が不可欠だという事実である。われわれが直面する現実在即て言えば、福祉国家的介入政策と長期雇用の保証がなければ、すなわち多かれ少なかれ官僚制的になってしまう公的領域と私的領域の双方における専門化したシステムがなければ、人は安心して生きられないということである。セネットは、「組織がもはや長期的な枠組みを提供しないとすれば、個人はみずからの物語を即興でつむぎだすか、あるいは、一貫した自己感覚ぬきの状態に甘んじなけ

ればならない」[Senett2006: 邦訳11頁]と述べている。

8. 科学主義批判／近代主義批判の終焉——結びに代えて

ポストフォードイズムないし「第二の近代」の理論家たちの言葉に耳を傾けるならば、いま、われわれが批判すべきは、もはや規則や規律が支配する硬直化した官僚制組織ではないし、われわれが目指すべきは、そうした官僚制的・自然主義的世界観を脱構築することでもない。むしろ批判しなければならないのは、官僚制的支配原理の欠如によって生み出される不安定性と自己管理の思想、そして人間を剥き出しの「潜在能力」のままにとどめておこうとする、転倒した自然主義である。

官僚制化＝マクドナルド化の拡大に相変わらず警鐘を鳴らしつづけるリッツェのような理論家に、まったく理が無いというわけではない。しかし、現今の状況下で官僚制原理を批判し計画的かつ画一的な大規模行政を批判することは、むしろ規制緩和をさらに推進するための口実に利用され、労働条件の悪化とアイデンティティの不安定化をますます拡げる結果になりかねない。

「批判」の方法を根本から問い直さなければならない。1960年代までは有効だった科学主義批判と近代批判とを両輪とする批判の方法は、もはや説得力をもたない。たしかに、科学は依然として権力を握っている。しかし科学／学問はすでに「科学主義」と表現されるような硬直化した手法によって営まれているわけではない。労働管理はむしろ多様でフレキシブルとなり、一見すると労働形態における選択肢が広がっているかのように見えてしまう。

「近代主義」という把握にもとづく批判もまた、すでに効力を失っている。「第一の近代」で問題となった「大衆動員」は、依然として問題である。しかし資本の回転のために動員される労働者は、それぞれ「個人化」し「自己管理」を強いられながら動員され、そこに中央集権的な組織原理を見いだすことはない。

こうしたなか、今後ヴェーバー研究はどのような方向へ向かえばよいのだろう

うか。ヴェーバーといえば、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において「合理的・方法的生活態度」を実践する近代人の起源を描いている。それはまた、「自己管理」する近代人の起源であると解釈することもできる。ただし、そこで用いられる「鉄の檻」の比喻については若干の修正が必要だろう。「檻」は、今ではむしろ人々が還るべき安住の地と見なされている⁽⁴⁾。そして今われわれは、可視的な檻の外を漂いつつ、ひとりひとりが「個人化」という不可視の檻の中に閉じ込められているのである⁽⁵⁾。

注

- (1)「人間ヴェーバー」を扱った研究のうち、とくに有名なのは〔安藤1972〕であろう。また〔橋本1999〕のように、ヴェーバーを手掛かりに理想的な「人格」について論ずる研究もある。
- (2)「近代批判」の立場を鮮明にしたヴェーバー研究として、〔山之内1993〕や〔姜2003〕が挙げられる。
- (3)ヴェーバーの実証主義／科学主義批判については、拙稿〔鈴木2007〕を参照。
- (4)「檻Gehäuse」が「殻」と訳せることに着目し「殻」の保護機能に注目した研究として、〔荒川2007〕を参照。
- (5)「個人化」への批判については、拙稿〔鈴木2006〕を参照。

文献

安藤英治『ウェーバー紀行』岩波書店、1972年。

荒川敏彦「殻の中に住むものは誰か——「鉄の檻」的ヴェーバー像からの解放」、
『現代思想 総特集 マックス・ウェーバー』11月臨時増刊、78-97頁、
2007年。

Bauman, Zygmunt, 1989, *Modernity and the Holocaust*, Cornell
University Press. (森田典正訳『近代とホロコースト』大月書店、2006年。)

Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press. (森田典正訳
『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店、2001年。)

Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere
Moderne*, Suhrkamp. (東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代へ
の道』法政大学出版局、1998年。)

Habermas, Jürgen, 1989, *Technik und Wissenschaft als “Ideologie”*,
Suhrkamp. (長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』平凡社ライ
ブラリー、2000年。)

羽入辰郎『マックス・ヴェーバーの犯罪——『倫理』論文における資料操作の
詐術と「知的誠実性」の崩壊』ミネルヴァ書房、2002年。

羽入辰郎『学問とは何か——『マックス・ヴェーバーの犯罪』その後』ミネ
ルヴァ書房、2008年。

Harvey, David, 1989, *The Condition of Postmodernity*, Basil Blackwell.
(吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店、1999年。)

橋本努『社会科学の人間学——自由主義のプロジェクト』勁草書房、1999年。

Husserl, Edmund, 1996, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und
die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die
phänomenologische Philosophie*, 3. a. Auflage, Meiner. (細谷恒夫・
木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中公文庫、1995年。)

姜尚中『マックス・ウェーバーと近代』岩波現代文庫、2003年。

今野元『マックス・ヴェーバー——ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』
東京大学出版会、2007年。

今野元「生身の人間ヴェーバーの両義性に興味を引かれることはないのか——
「知性主義の逆説」とは、きわめて現実政治的、日常生活的な問題である」、
『図書新聞』第2878号（2008年07月19日）、[http://toshoshimbun.jp/
books_newspaper/week_description.php?shinbunno=2878&sysyoseki=](http://toshoshimbun.jp/books_newspaper/week_description.php?shinbunno=2878&sysyoseki=822)
822

Marcuse, Herbert, 1991, *One-Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society*, Beacon Press. (生松敬三・三沢謙一
訳『一次元の人間——先進産業社会におけるイデオロギーの研究』河出書
房新社、1980年。)

Mommsen, Wolfgang J., 1974, *Max Weber und die Deutsche Politik 1890-1920*, 2. überarbeitete und erweiterte Auflage, J.C.B.Mohr.
(安世舟・五十嵐一郎・田中浩訳『マックス・ヴェーバーとドイツ政治1890～1920 I』未来社、1993年、安世舟・五十嵐一郎・小林純・牧野雅彦訳
『同 II』未来社、1994年。)

Ritzer, George, 1996, *The McDonaldization of Society*, rev. edition, Pine Forge Press. (正岡寛司訳『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、
1999年。)

Sennett, Richard, 1998, *The Corrosion of Character: The Personal Consequences of Work in the New Capitalism*, W.W.Norton & Co.
(斎藤秀正訳『それでも新資本主義についていくのか——アメリカ型経営と
個人の衝突』ダイヤモンド社、1999年。)

Sennett, Richard, 2006, *The Culture of the New Capitalism*, Yale Univ. Press. (森田典正訳『不安な経済/漂流する個人——新しい資本主義の労働・消費文化』大月書店、2008年。)

鈴木宗徳「〈個人化〉のポリティクス——格差社会における〈自立〉の強制」、

九州国際大学経済学会『九州国際大学経営経済論集』13巻1・2合併号、
123-145頁、2006年。

鈴木宗徳「第X章 ヴェーバー」、須藤訓任編『哲学の歴史9 反哲学と世紀末』
中央公論新社、2007年。

パオロ・ヴィルノ『ポストフォーディズムの資本主義——社会科学と「ヒュー
マン・ネイチャー」』人文書院、2008年。

Weber, Max, 1920, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd.1.,
J.C.B. Mohr.

Weber, Max, 1968, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 3.
Aufl., J.C.B. Mohr.

Weber, Max, 1972, *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriß der
verstehenden Soziologie*, 5. rev. Auflage J.C.B. Mohr.

Weber, Max, 1980, *Gesammelte Politische Schriften*, 4. Aufl., J.C.B.
Mohr.

山之内靖『ニーチェとヴェーバー』未来社、1993年。

(すずき むねのり・法政大学・社会学)

※この論文は、2006年度九州国際大学社会文化研究所共同研究の成果である。

